

# ‘disgrace’ の脅威

## Trollope の *The Macdermots of Ballycloran* における自伝的要素

委文 光太郎

### 1. 序

旅行記や短編集まで含めると生涯で 60 以上もの作品を世に送り出してきた Anthony Trollope (1815-82) であったが、その作家としてのスタートは意外にも遅く、彼が処女作 *The Macdermots of Ballycloran* (1847) の執筆に取り掛かった時には、26 歳でアイルランドの郵政監察官補佐として働き始めてからおよそ 2 年もの月日が流れていた。この作品は次作の *The Kellys and the O’Kellys* (1848) とともに、Michael Sadleir によって ‘prentice works<sup>1)</sup>’ という烙印を押されるなどしたため、R. C. Terry から ‘the most neglected first novel of any English author of recognized achievement<sup>2)</sup>’ と評されるほど、Trollope の数ある作品群の中でも長い間忘れ去られた存在になっていた。

この作品の主人公であり、最終的に絞首刑に処される運命にあったアイルランド人カトリック教徒 Thady Macdermot の死に関しては主に二つの見方がある。まず大勢を占めているのが、彼を ‘a victim of Irish history and English politics<sup>3)</sup>’ と見なすものである。つまり、Robert M. Polhemus の言葉を借りれば、‘Historical determinism<sup>4)</sup>’ が当時のアイルランド社会全体を容赦なく支配し、アイルランドの人々の意志では到底どうすることも出来ない状況にあったという見方である。これにより、イギリス本国とは異なる当時のアイルランドの特異な社会状況が前面に押し出されることとなる。そして、Sarah Gilead に至っては次のような見解まで示している。

Characters’ moral, psychological, social, and political differences are eventually revealed as irrelevant in the face of overwhelming arrays of determining forces, so that the characters, despite surface distinctions, turn out to be doubles of one another.<sup>5)</sup>

この結果、登場人物に対する個別的な視点は弱められ、「集団」として見なす傾向がより一層強くなる。

一方、こうした見方とは一線を画しているのが E. W. Wittig で、彼は従来の批評を踏まえた上で次のように話している。

...although his [Thady's] actions are mitigated by circumstances, still the novel presents him as often acting unwisely and wrongly. The clear implication is that he—an average man, the first of Trollope's unheroic heroes—has a choice and is responsible.<sup>6)</sup>

Wittig のこの意見は Thady の内面に目を向かせるきっかけとして評価されてしかるべきものだが、残念なことに、彼は Thady の誤った行動の原因が何であったのかなどの追求を避けてしまっている。そこで、本論では従来の *The Macdermots of Ballycloran* 論のようにまずアイルランド社会の特異性に目を向けるのではなく、その登場人物、とりわけ主人公である Thady の精神面に焦点を絞り、少年時代の Trollope との関連性を通してこの作品を論じてみたい。

## 2. 'disgrace'

そもそも Thady が犯罪者として捕えられ、裁判によって絞首刑の判決が下されたのは、駆け落ちするため家の前から彼の妹の Feemy を抱えて連れ出そうとしたプロテスタントの「密造酒取締官」('Revenue officer') Ussher を彼が偶然発見し、半ば条件反射的にその時手にしていたこん棒で彼の頭部を殴り、死に至らしめてしまったことにあった。それは Thady が Ussher に結婚の意志がないことを見抜き、妹に悪い噂がたつ前に何とか二人の交際を辞めさせようと躍起になっていたまさにその矢先の出来事だった。

結局 Thady はこの行為により絞首刑に処せられ、その短い生涯を強制的に終えさせられてしまうのだが、なぜ彼が有罪となってしまったのかを検証する前に、彼の Ussher 殺害が実は法律上、有罪には該当しないという事実を確認しておきたい。すべての証人の反対尋問が終了した後、裁判官は陪審員に向かってこう述べている。

...the prisoner could not be considered as guilty of murder, if there was ground to believe that he had committed the act whilst the deceased was forcibly carrying off his sister; and that if they believed that the prisoner had never before premeditated the death of the man he killed, he could not be considered to have been guilty of the crime for which he was now tried.<sup>7)</sup>

Thady が Ussher を殴りつけた時、寒い屋外で恋人が来るのを長い間待っていたために気絶していた Feemy は、彼の目前で「力づく」で連れ出されようとしていたし、Thady は二人が駆け落ちを計画していたことなど夢想だにしていなかったことから彼の無罪は容易に推測できる。

それでは、なぜ彼は有罪の判決を下されてしまったのか。そこには様々な偶発的、間接的要因が重なっている。中でも最も大きな影響力を及ぼす結果となったのは、「自分は当時気を失っていた」という Thady の無罪を決定づける証言をする直前に起きた Feemy の死と、長い間 Thady の従者として仕事を手伝っていた Pat の造反にあった。Macdermot 家の崩壊をいち早く察した Pat は、忠誠の対象をまさに彼らの敵対関係に当たる Keegan へと秘密裏に変えていたのである。裁判で証人として出廷を求められた Pat は Keegan に買収されて、Thady の有罪判決に加担するような嘘の証言まで行なっている。結果的に Pat のこうした偽証を信用し、採用してしまったアイルランドの裁判制度の問題点を指摘することも可能だが、それよりも Thady の人生の転換点を振り返ると、常にそこに Pat の存在があり、重要な役割を果たしていたことは否定できない。そこで、Pat の存在と彼が Thady に与えた影響について考察したい。

働けない父の代理人として実質上の地主となっていた Thady には、自らの仕事を補佐する立場の人間が是非とも必要であり、その仕事内容は実に多岐にわたるものだった。

...his business was not only to assist in collecting the rents, by taking possession of the little crops, and driving the cows, or the pig; but he was, moreover, expected to know who could, and who could not, make out the money; to have obtained, and always have ready, that secret knowledge of the affairs of the estate, which is thought to be, and is so, necessary to the managing of the Irish peasantry in the way

they are managed.<sup>8)</sup>

ここから、Pat に要求された仕事内容が単なる補助的なものではなく、生産性の低い土地のため地代の滞納が日常茶飯事となった状況下で、地主として存続していくためにはどうしても必要不可欠な仕事を任せられていたことがわかる。裏を返せば、Thady が Pat に対してそれだけ絶大なる信頼を寄せていたであろうことは想像に難くない。こうした信頼を逆手にとって、前途有望な Keegan に有利な情報を提供するなどして取り入っていた Pat であったが、Trollope はこうした彼のような存在について次のように言及している。

That such a man as [Pat] Brady is described to be, should exist and find employment [as an informer] in a country, is a fact which must shock and disgust; but that it is a fact in great parts of Ireland, those who are most conversant with the country will not pretend to deny.<sup>9)</sup>

つまり、Pat のような情報提供者は当時のアイルランド社会には無くてはならない存在であったと言うのだ。確かに文献を調べてみると、Trollope の指摘通りに、アイルランドではかつてスパイ活動が公然と行なわれていたことがわかる<sup>10)</sup>。これにより Pat をアイルランド社会ゆえの特異な存在、つまり、従来の批評のように ‘Historical determinism’ の一因として、「Thady を翻弄した人物」と解釈することも可能だろう。しかし、そうすることで Thady の内面部分への視点がぼやけてしまうことは否めない。ここではあくまでも Pat を「自らの保身のみを考えている狡猾な人物」と捉え、Thady の性格上の問題点を浮き彫りにしたい。

常に Thady のそばにいた Pat は、仕事関係以外でも事あるごとに様々な助言を Thady にしている。ここでは、結果的に Thady の人生の転機ともなったふたつの重要な出来事を取り上げてみよう。最初は、Keegan が借金返済の代わりに家を含めた土地すべてを買い上げるという最終提案をしに Macdermot 家を訪れた時のことである。慢性的な酩酊状態に陥っていた Thady の父親 Larry からその提案を一蹴された挙げ句、罵声まで浴びせられて家を追い出された Keegan は頭に血が上り、後を追ってきた Thady に対して全く関係のない Feemy のことを悪く言ってしまう。この直後 Thady

はかっとなり殴りかかるが、Keegan の返り討ちに遭いしばらく動けずに道端に一人取り残される。彼は痛みに耐えながら Keegan への復讐心に燃えるが、しばらくして冷静になると、取りあえず一番の相談相手である John 神父の所へ行こうと決める。彼がそのまま神父の所に行けば、いつものように神父は彼の話じっくり聞いて彼を宥め、勇気づけ、そして取り返しのつかない過ちから救ってくれたはずである。しかし、そうとはならない。Pat が二人の喧嘩を偶然目撃していたのだ。彼は神父の所へ行こうとする Thady に様々な理由をつけて辞めさせ、Thady の小作人でもある男達の秘密組織に協力を求めるように助言する。ちなみに、こうした秘密組織は 1830 年代に再度アイルランドにて活発化した、農民達を主体とする反プロテスタントの秘密組織 ‘Ribbon Society’ の流れをくむものである<sup>11)</sup>。結局、この Pat の助言に従い Thady は神父のもとを訪ねるのを辞め、その秘密組織に顔を出す。この時彼は正式に組織に加わることはなかったが、後の裁判で彼らと一緒にいたことを第三者から指摘され、陪審に悪い印象を与える結果となる。その意味において、この時 Pat が果たした役割は決して小さいとは言えない。

また、Pat の助言に安易に従ってしまった理由として、Keegan への復讐心に対して予想される John 神父の強い反発が掲げられている<sup>12)</sup>。確かにこれも大きな理由のひとつにちがいないが、それだけでは Thady の内面を完全に理解したことにならない。返り討ちによる激痛の中、彼が様々な思いを巡らしている部分を看過すべきではないだろう。

...he could not go up to the house. He could not meet his father, and tell him that, between them, they had destroyed all hopes of conciliation; that they must wander forth as beggars, to starve. He could not ask counsel from Feemy; his inability to protect her made him averse to see her.<sup>13)</sup>

つまり、John 神父の所へ行くという選択肢は、当初から彼にとって最善のものではなかったのである。家族の今後を左右する重大な問題ゆえに、本来なら一刻も早く家に戻ってどうすべきかを話し合うのが彼にとって最も望ましい方法だったのだ。それを選択できない理由は上の引用からも明らかである。つまり、自分の存在意義が見い出せない以上、家族に会わせる顔がないという彼の勝手な思い込みによるものである。Keegan の提案を却下した

のはあくまで父親であり、それに比べると彼の過失は微々たるものに過ぎないのだが、彼の責任感と、とりわけ面目に対するあまりにも強い意識が彼の行動を束縛しているのだ。恋人や友人にならまだしも、自らの肉親に対してこのような強い恥の意識を持つことはある種異常なことであり、ここに Thady の性格上の弱さを垣間見ることができる。

もうひとつの場面は Ussher を殺してしまった直後のものである。とにかく誰かに知らせなくてはと感じた Thady は、Pat を現場に連れ出して事の成り行きを説明する。これからどうするべきか皆目見当もつかない Thady は、秘密組織の一員で自らの小作人でもある Joe に頼んで山奥の隠れ家に匿ってもらうように Pat から助言を受ける。そして、ここでもまた素直に彼に従ってしまう。結局彼は数日後に考え直して警察に出頭するが、匿ってもらう交換条件として、山小屋にて正式に組織の一員となるべく宣誓をしてしまう。この宣誓が間接的にではあるが Thady の判決に少なからず悪い影響を及ぼすこととなる。現実には、こうした秘密組織において誓いは絶対に遵守されねばならないものであり、彼らの組織にも次のような約束事があった。

And thirdly, that he [every member] would aid and assist in all scheme of vengeance and punishment which would be entered into by those with whom he was now bound, against any who attempted to molest them, but especially against all Revenue officers and their men.<sup>14)</sup>

Joe は Thady の出頭後、この誓いに基づき Thady の身代わりとして、自発的に Keegan の片足切断という報復攻撃を実行してしまう。この衝撃的な事件がアイルランド社会全体に暗く憂鬱な影を投げかけ、その見せしめとして Thady への厳罰を求める声が日増しに強くなる。こうしたアイルランド社会特有の間接的要素の積み重ねが Thady の運命を支配しているという解釈はもちろん可能だが、そもそもこうした結果をもたらすことになった根本的な原因を見過ごすべきではない。もし、Ussher の死の直後、Thady が逃げも隠れもせず警察に正々堂々と出頭し事情を説明していたら、秘密組織への正式な加入やそれに付随する Keegan への襲撃事件は起こりえなかったし、裁判の行方も当然変わっていたからである。

それでは、なぜ Thady はこの時も Pat の勧めにあっさりと応じてしまっ

たのか。結論から言うと、彼は ‘the disgrace of being in confinement<sup>15)</sup>’ を恐れたからである。収監されることそれ自体への恐怖ではなく、それにより生じる ‘disgrace’ を恐れていたという点においてこれは実に興味深い。ここで、冒頭にも出てきた Wittig の発言をもう一度振り返ってみよう。彼は Thady について、‘he...has a choice and is responsible.’ と指摘した。確かに今まで見てきて明らかなように、常に Thady には Pat の助言を含めた選択肢が数多く存在し、その中から彼の明らかな自由意志と自己責任において最終的に Pat の助言を選択したにすぎない。そこで、結果として常に悪い方を選択してしまう Thady の問題点を考える際、上述のふたつの場面からも明らかなように、鍵となるのが ‘disgrace’ を過度に恐れてしまう Thady の内面的脆さなのである。

### 3. 存在の意味

従来のアイルランド社会重視の批評ではまず指摘されてこなかったことだが、Thady の ‘disgrace’ に対する恐怖感は、それにより彼の行動のほぼすべてが決定されると言っても過言ではないほど大きなものである。確かに Macdermot 家が地主である以上、Thady のみならず Larry や Feemy にもそうした面が見られないわけではないが、Thady の前では彼らの恐怖感はなきに等しい。Larry が精神に異常をきたして以来、自分一人で家族を守らなければという強い責任感に常に苛まれてきた Thady だったが、彼が恐れていたのは、家族、つまり Macdermot という由緒ある名前と、とりわけいづれ結婚を迎えるであろう Feemy に ‘disgrace’ がもたらされることであった。彼が突如 Keegan に殴りかかったのも Feemy に浴びせられた罵声が直接の原因であり、また Ussher を殺してしまった直後、彼は Larry の元に行き ‘He was bringing disgrace on you Larry, and on your name; he was disgracing your family, and your daughter, and myself...<sup>16)</sup>’ と理解を求めていることからそれがわかる。

しかし、Thady が恐れていたのは家族への ‘disgrace’ だけではない。いや、むしろそれ以上に彼は自分に対する ‘disgrace’ により脅威を感じていたのではないだろうか。それを示す記述はあちこちに散らばっている。例えば Ussher 殺害後、収監による ‘disgrace’ を恐れた彼は山奥へ逃避するが、潜伏中に彼を最も怯えさせたのは絞首刑による死そのものではなく、‘the disgrace of death<sup>17)</sup>’ だった。また、裁判中に突然 Feemy の死を告げられると、彼はショックで立っていられなくなるというのではなく、傍聴してい

る人々に悲嘆に暮れる姿を見られたくないと被告席に身を沈める<sup>18)</sup>。その後裁判官が陪審員に申し立ての略説を開始しても、傍聴席の人々の視線に耐えられないと感じた Thady は最後まで立ち上がることもできない<sup>19)</sup>。そして、刑の執行直前に彼が唯一の面会者である John 神父に最後に依頼したことは、自らの絞首刑の見物に誰も来ないように人々に呼びかけてほしいというものだった<sup>20)</sup>。こうしてみると、Thady の自分に対する ‘disgrace’ への恐れ方は明らかに常軌を逸していることがわかる。瞬間的な反応や究極的な感情でさえも退けてしまうほどの恐怖感を、なぜ彼は抱くようになったのだろうか。これを解く鍵が、Trollope の少年時代が描かれている *An Autobiography* (1883) にある。

自伝によると、彼のロンドンでの少年時代は Thady のように ‘disgrace’ との壮絶な戦いであったことがわかる。(実際に *An Autobiography* の中にも ‘disgrace’ という語が何度も繰り返し使用されている<sup>21)</sup>。) ただひとつの違いがあるとすれば、少年 Trollope が ‘disgrace’ の深淵で苦しみがいていたのに対して、Thady は ‘disgrace’ に怯えそれを回避することで精一杯だった点である。

それでは、具体的に Trollope の少年時代を振り返ってみよう。彼の父親 Thomas は当初有能な法廷弁護士だったが、その短気であまりにも激しい気性が仇となり、周囲の人達は徐々に彼の元を去っていく。それは愛する彼の家族でさえも遠ざけてしまうほどで、突如彼が法廷弁護士の仕事を諦めて、ふたつめとなる農場を購入し、それで生計を立てると宣言した時、それが誰の目からも無謀だと映っていたにもかかわらず、家族の誰ひとりとしてそれを阻止するどころか口を挟むこともできない。案の定、何の知識も経験も資金すらない Thomas はなす術もなく、ただ破産の日を待つしかない。一家の困窮した生活の皺寄せは当然少年 Trollope にも及び、彼の少年時代に重く暗い影を投げかける。父親の事業失敗による極貧生活は真っ先に彼の身なりを哀れなものにし、それが大柄で目立つ体格とあいまって同級生達に格好の攻撃材料を提供する結果となる。学校中の生徒から「のけ者」(‘Pariah’) 扱いされた彼は反発することもできず、ただ目立たぬようにこそこそ過ごすしかない。父親の仕事の都合で何度か学校を移るも、友達もできず惨めで屈辱的な日々は最後まで変わることはなかった。ここで注目すべきことは、Trollope が自らを否定的に捉えている反面、それが第三者からの非難に対する免疫とは必ずしもなっていない点である。



I was big, and awkward, and ugly, and, I have no doubt, skulked about in a most unattractive manner. Of course I was ill-dressed and dirty. But, ah! how well I remember all the agonies of my young heart; how I considered whether I should always be alone; whether I could not find my way up to the top of that college tower, and from thence put an end to everything?<sup>22)</sup>

心の奥底では自らを否定的になど捉えていないという解釈は、その要因が服装や体格などある種客観的なものである限りにおいて成立しないだろう。それよりも、自らの欠点を完全に掌握しているということは、同時にどうにもならないという諦めでもあり、それが第三者によって追認されることで、より一層の絶望感が込み上げ、それが時に自殺をも考えさせるほど少年 Trollope を苦しめたと見る方が妥当ではないだろうか。そうだとすれば、Thady の ‘disgrace’ に対する異常なまでの恐怖感も納得がいく。つまり、‘disgrace’ による途方もない苦痛を実際に経験してしまったことで、その ‘disgrace’ が本来内包する脅威を人一倍強く認識し、それ以後の行為としては ‘disgrace’ からの逃避以外考えられなくなってしまうのである。こうしてみると、少年 Trollope と Thady の間に横たわる ‘disgrace’ への対応の相違は対立線上にあるのではなく、実は延長線上にあることがわかる。

少年時代の Trollope と Thady の性格面を比較した時、最大の共通項は両者とも自分に自信が持てない点にある。このことは、必要以上に ‘disgrace’ を恐れてしまう原因にも密接に繋がっているので考察に値するだろう。さきほど、Trollope は自らを否定的に捉えていたと述べたが、彼が自信を持てない根本的な原因を心理学的に分析する際、アメリカの高校生からデータを集め、以下の結論を導いた社会心理学者 Morris Rosenberg の指摘は非常に参考となる。

The data suggested that extreme *parental indifference* was associated with lower self-esteem, and was even more deleterious than extreme punishment or control of the child. *Parental indifference* was interpreted as indicating a lack of love, a failure to treat the child with respect, a failure to give him encouragement and a tendency to consider the child as something of a nuisance. The child who does not perceive himself as being worthwhile in the eyes of his parents

comes...to think that he is indeed a rather worthless person.<sup>23)</sup> [*my italics*]

Trollope の父親は経済的に彼を援助できなかったばかりか、そのことが学校での仲間はずれの大きな原因にさえなっている。子供からすれば、父親とは本来自分を守ってくれる大きな存在であるはずだけに、こうした状況が少年 Trollope に与えた影響は計りしれない。また、母親に関しても同様のことが言える。彼女は彼が 12 歳という人間形成の重要な時期に彼を一人イギリスに残し、家計を支えるためアメリカへ渡ってしまう。自伝の中で彼は ‘I have no clear knowledge of her object [to go to America]....<sup>24)</sup>’ と述べるにとどまっているが、一人取り残されたその寂しさは容易に見て取れる。事前に母親が彼に理由をきちんと納得のいく形で説明していたのか否かという客観的な事実はさておき、彼が母親に対して ‘a lack of love’ を感じたであろうことは明らかである。つまり、このような ‘parental indifference’ が根本的な原因となり、彼の自信喪失に繋がったと推察できる。

Rosenberg によると、‘parental indifference’ を経験した子供は自分のことを ‘a worthless person’ と思い込んでしまう傾向にあるようだが、これを裏付けるかのような発言が *An Autobiography* の中に見られる。

There had clung to me a feeling that I had been looked upon always as an evil, an encumbrance, a useless thing, — as a creature of whom those connected with him had to be ashamed. And I feel certain now that in my young days I was so regarded. Even my few friends who had found with me a certain capacity for enjoyment were half afraid of me.<sup>25)</sup>

少年時代の Trollope は自らを価値のない人間どころか、他人に害を及ぼす「マイナスの存在」とさえ自覚していたことがわかる。前述のように、学校で「のけ者」扱いされても反発せずにこそこそしていたことから考え合わせると、誰の役にも立たない代わりに悪い影響も及ぼさない「ゼロの存在」にすら彼は憧れを持っていたのかもしれない。いずれにせよ、数少ない友人との間でさえ対等な関係で喜びや悲しみを共有できない少年が、自分に自信を持ち、自らの存在に疑問を持たずにいられる道理がない。

一方、Trollope は Thady について次のような言及をしている。

Thady's disposition had not been prone to hope; he had never been too sanguine—never sanguine enough. From the years to which his earliest memory could fall back, he had been fighting an earnest, hard battle with the world's cares, and though not thoroughly vanquished, he had always been worsted. He had never experienced what men called luck, and he therefore never expected it. Few men in any rank of life had known so little joy as he had done, or had so little pleasure....<sup>26)</sup>

これはあたかも Trollope が自らの少年時代を振り返り、当時の辛い心情を吐露しているかのような一節である。普通の子供なら経験せずに済んだであろうことに否応なく巻き込まれた上、「喜び」や「楽しみ」は取り上げられて他人の幸福を端から羨ましげに見ることしか許されない。その結果、期待を裏切られて傷つくことを恐れてしまい、最終的には希望すら抱かなくなる。このような心の動きは少年時代の Trollope そのものである。また、自分に誇れるものが何ひとつないと感じていた Thady は家族を 'disgrace' から守ることが自分の中での唯一、そして最大の存在意義になると信じて家族を守るために必死に生きてきたのだが、その意識があまりにも強かったために、彼は家族に 'disgrace' がもたらされることによって生じる自己の存在意義、言い換えるならば、自らの価値の否定に対して途方もなく大きな恐怖心を抱かざるを得ない。彼が自己への 'disgrace' に対して驚くほど敏感であったのも、自分の存在意義に並々ならぬ執着心を持ち続けていたからなのである。つまり、彼の短い生涯は「自分の存在に果たして意味はあるのか」という問いに対する壮絶な闘いであったのだ。これはまさしく、常に自分の存在に疑問を持ち、時にその意味を見失い、結果的に自殺をも考えてしまうような精神状態にあった少年 Trollope のそれに他ならず、彼が過去の自分をモデルとして Thady の内面を描いていることは否定できないだろう。

#### 4. 結

*An Autobiography* の冒頭で、Trollope は次のような興味深い少年時代の総括を行なっている。

My boyhood was, I think, as unhappy as that of a young gentleman could well be, my misfortunes arising from a mixture of poverty

and gentle standing on the part of my father, and from an utter want on my part of that juvenile manhood which enables some boys to hold up their heads even among the distresses which such a position is sure to produce.<sup>27)</sup>

自らの不幸の原因が実に冷静かつ客観的に分析されているが、ここで彼自身の問題点として挙げられている後半部分に注目したい。彼は、苦境の中でも何とか持ちこたえようとする‘manhood’が自分に欠けていたと告白している。これを「‘disgrace’からの逃避」と置き換えると、すべてがまさしく *The Macdermots of Ballycloran* の中で Thady を苦しめていた要因と一致する。由緒ある Macdermot の名を自分が守り続けなくてはならないという強い責任感と、返済不能の借金や小作人達の慢性的な地代滞納といった厳しい現実。その埋められることのない溝が終始 Thady を悩ませ続けていたわけだが、もし仮に‘disgrace’を恐れず正面から立ち向かえる‘manhood’が彼にあれば、これまで述べてきて明らかなように、判決を含めた彼の人生は大きく変わったに違いないからである。

確かに *The Macdermots of Ballycloran* はアイルランドを舞台とした作品であり、実に様々な当時のアイルランドの社会状況を忠実に取り入れながら物語が展開されているため、そうした側面を完全に無視することは作品の解釈を不完全なものにする恐れがある。しかし、その特異な社会性を重視し過ぎることで見落としてしまうものがあることも否定できない。従来の「特殊なアイルランド社会の一構成員にすぎない Thady」という視点ではなく、「主人公としての Thady 個人」を前面にして彼の内面に着目してみると、アイルランドで生活する以前の少年 Trollope の精神性と大いに符合することがわかる。また、Trollope が過去の自分を Thady に重ね合わせて客観的に描写することに成功しているということは、‘disgrace’に苦しみもがいていた過去の自分から決別し、外部から第三者として冷静に自己分析できたということに他ならず、その意味においてこの作品は少年 Trollope の物語であると同時に、彼の精神的成熟の軌跡でもあるのだ。

## 註

- 1) Michael Sadleir, *Trollope: A Commentary* (London: Constable & Company Ltd., 1947), p.142.

- 2) R. C. Terry, *Anthony Trollope: The Artist in Hiding* (London: Macmillan, 1977), p.181.
- 3) Robert Tracy, 'Introduction' to *The Macdermots of Ballycloran* (Oxford World's Classics), p. xvi.
- 4) Robert M. Polhemus, *The Changing World of Anthony Trollope* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1968), p.13.
- 5) Sarah Gilead, 'Trollope's Ground of Meaning: *The Macdermots of Ballycloran*' *Victorian Newsletter*, 69 (Spring 1986), p.23.
- 6) E. W. Wittig, 'Trollope's Irish Fiction' *Eire*, 9 (1974), p.100.
- 7) *The Macdermots of Ballycloran*, p.597.
- 8) Ibid., p.16.
- 9) Ibid., pp.173-4.
- 10) 一例として Stanley H. Palmer, *Police and Protest in England and Ireland 1780-1850* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1988), p.468. 参照。
- 11) *The Macdermots of Ballycloran*, p.37. 参照。
- 12) Ibid., pp.177-8.
- 13) Ibid., pp.169-70.
- 14) Ibid., p.426.
- 15) Ibid., p.378.
- 16) Ibid., p.383.
- 17) Ibid., p.420.
- 18) Ibid., p.594.
- 19) Ibid., p.603.
- 20) Ibid., p.616.
- 21) Anthony Trollope, *An Autobiography* (Oxford World's Classics), pp. 4, 5, 17, 41, 53, 60. 参照。
- 22) Ibid., p.9.
- 23) Christopher Bagley and others, *Personality, Self-esteem and Prejudice* (Farnborough: Saxon House, 1979), pp. 131-2.
- 24) *An Autobiography*, p.7.
- 25) Ibid., p.60.
- 26) *The Macdermots of Ballycloran*, p.529.
- 27) *An Autobiography*, p.2.